42　プレンク（J.J.E. von Plenck, 1739–1807）について

石田純郎

プレンク（Joseph Jakob Edler von Plenck, 1739–1807）はオーストリア人でありながら彼の著書の多くがオランダ語に翻訳され、さらに日本語に重訳された。蘭学書の原著書の中で、最多数が日本語に翻訳されたのは、プレンクであると考えられる。演者は、『緒方洪庵の蘭学』（一九九二年刊）の第一章「プレンクとその著書」（以後「第一稿」とする）および『洋学資料による日本文化史の研究Ⅳ』（一九九六年刊）の「プレンクに関する書誌学的考察」（以後「第二稿」とする）でプレンクについて論じた。今回トルナバを訪れ、若干新しい知見を得たので報告する。プレンクの著書をウイーン大学医史学研究室図書館を調査し第一稿で示し、さらに、ブダペストのゼンメルワイス図書館、国立ウイーン図書館などを調査し第二稿で示した。ラテン語版が二九種六八版、ドイツ語版が三一種八一版、オランダ語翻訳版が一五種二九版、日本語重訳版が三八種（刊本一二種、写本二六種）の合計一一二種が把握された。著書名の詳細は第二稿のリストをご覧頂きたい。なお日本語版のプレンクの表記法としては、布斂吉、布斂己、布斂幾、布斂、布斂吉、布連機、布冷吉、弗斂吉、不令牟吉、普斂幾などがある。

プレンクは一七三九年（三二年、三三年、三八年説もある。'Biographisches Lexikon der Hervrragenden Aerzte aller Zeiten und Völker, (Wien, 1886) に拠れば、三八年、さらにこの記事の中の Anderen に拠れば三二年、'Magyar Irok Elete es Munkai, A Magyar Tudomanyos Akamenia Megbizasabol,（ハンガリー人名事典、Budapest 1905）に拠れば三九年。月日はいずれも同じ）一一月二八日にウイーンで生れた。一七五三年にレッテル（J. Chr. Retter）に入門し、徒弟奉公で外科医教育を開始した。五六年にギルド外科医の資格を得、ヨハネス病院で実地修練を受け、七年戦争の時には軍医として従軍した。戦後除隊し、ギルド外科医の親方となり外科医診療所を経営すると共に多

数の著作を公刊し始めた。一七七〇年にハンガリーのTyrnau（現、トルナバ Trnava）大学の理論外科と外科臨床の教官に就任した。トルナバは現在のスロバキアの最古の都市で、一六三五年に大学（哲学部・神学部）が開設された。後に法学部と一七六七年に医学部が増設された。大学の校舎が二、三棟と大学教会が現存している。七七年にこの大学はマリア・テレジアの意向でブダに移転し、オーフェン（Ofen、ブダの古称）大学となり、プレンクはそこでも教官を務めた。一七八三年にプレンクは、ウイーンのヨゼフ・アカデミー（ウイーン陸軍軍医学校）の教官に就任した。この学校は一七七五年に六ヵ月の軍医教育コースから始まり、八一年に二年制となり、皇帝ヨゼフII世がこの教育コースを完全な内科外科学校に拡充した。この学校の愛称はこの皇帝の名にちなんでいる。現在のウイーン大学医史学研究所棟である。八五年に内科のドクトルと外科のマギステルの学位を与える権限を持った内科・外科アカデミーに昇格した。八六年当時の同校の教官は五名で、その一人がプレンクである。この軍医学校ではヨーロッパで初めて外科と内科、すなわち、技術と理論が一体化されて教えられた。プレンクは就任当初、植物学、化学、薬理学を担当した。後に総合的軍事薬局制度の検査官も務めた。九七年には貴族階級に列せられ苗字にvonが付いた。一八〇六年まで同校に勤務した。一八〇七年八月二四日にウイーンで没した。

彼の著書は非常に人気があり版を重ねた。その理由は、専門医学知識を判りやすく簡潔に説明しただけでなく、時おり警句をこめた簡素な言葉で味付けをしていたためである。医史学者ヘッケル（Justus Friedrich Carl Hecker, 1795-1850）は、後に「プレンクの本は医学教育を浅くしてしまう原因となった」と非難した。

（新見女子短期大学）